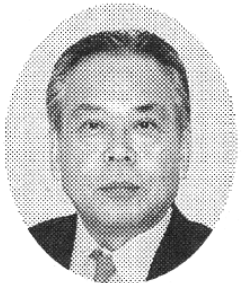


若手技術者：「事業量の確保」と「労務単価」と「技術者のやりがい」

特別寄稿

群馬県建設業協会会長 青柳 剛



それこそ桜が満開、春爛漫の4月、社内の土木技術者の結婚披露宴に出席してきた。4年近くも空いただろうか、久しぶりのお祝いの席である。以前はもう少し頻繁にあったような気がするから、それだけ若い社員の数が少なくなってきたということであろう。祝辞のために新郎の入社以来の履歴を調べてみた。2000年に技術系の高校卒業とともに入社した。18歳で入社、それまで大人しくて、いまひとつ、ひ弱な感じがしていたのが急に変わってしまった。3年目あたりだった。「土木の本を買ったりして、勉強もしている。変わった」と社内ですら噂にもなるほどの変わり様だった。

2級土木施工管理技士の資格もこの年に取得している。それまでは先輩技術者といっしょ。それが早速、県発注の2000万円弱の工事を一人で「主任技術者」として担当するようになった。夜間作業前に大きな声でKY（危険予知）活動の指揮を執っていた姿が頼もしく思い出される。担当した工事を辿ってみると、町村の土地改良工事が

変化の時代でも着実に技術者養成

ら始まり、農政の区画整理工事、林野庁の災害復旧工事、県土木のPC工事、その後08年からはほとんど毎年国土交通省の工事に従事、いまでは1級土木施工管理技士の資格も取り、国土交通省の河川工事の主任技術者・現場代理人として作業にあたるバリバリの技術者として成長した。

技術者のことといえば群馬県建設業協会では1年程前に「建設技術者問題に関するアンケート」を行った。一品一品現地生産の建設業にとって、産業としての根幹を支えているのが技術者であり、どんな変化の時代になっても技術者の養成を着実にしていくことが求められている。東日本大震災の発生とともに技術者不足問題が被災地を中心に浮き彫りになったが、被災地以外の群馬県でも「技術者の採用の募集を毎年何度出しても集まらない。ようやく高校生の新卒を採用できても3年も経たないうちに職種替え、辞めていってしまう。それぞれどこか、こうして毎年建設投資が減り続ければこの先の見通しも立たない。技術者の確保にまで手が回らない。冬の除雪もそのうち出来なくなってしまう……」と程度の差はあれ、抱えている問題の深刻さがあちこちから聞こえていた。

全国各地の度重なる事業量の減少に加えて過当競争によるダンピング（過度な安値受注）が引き起こしてきた弊害も大きい。人の確保どころか、ギリギリのところまで建設業をどっぴか経営しているのが実態だ。「しっかりと調査をし

て問題提起をしなければ、もろのづくり産業としての地方の建設業が崩壊してしまう」と考えながら、全協会員にアンケートを行ったのである。

技術者の象徴としての「1、2級土木施工管理技士」に限って言えば、20代の技術者の圧倒的な不足、過半数を50歳以上が占める——と調査結果は予想以上に衝撃的なデータとなって表れた。これでは5年後には技術者が半減してしまつて企業まで出てくる。早速これらのデータを携えて県庁の記者クラブで記者会見を行い、これ以降、さまざまな場を通して「技術者不足」について問題提起を行ってきた。

原因は事業量の減額もあるが、先行きの見通しが立たない状況が一番大きい。政治とつか政策に翻弄され、業界はどんどん疲弊していく。いきなり政権が変わった途端に進んできた事業がいともたやすく中止になってしまえば、「技術者の心」までもが壊れていってしまう。技術者としての矜持（きょうじ）がスタスタになる。

要は、場当たり的に事業量と仕組みを変えることを繰り返して来たから、人の採用も場当たり的なならざるを得ない状況が続いてきた。この建設業の構造的な仕組みに問題がある。加えて設計単価の基準になる「労務単価」、1999年度に普通作業員の単価が1万7100円だったのが12年度は1万3100円と、ここ何年間も下がり続けた結果、建設業で働いてみようと

思う若者がいつの間にかいなくなってしまったのである。現場作業としては一息つきそつな4月の始めを選んで結婚式を挙げた社員、仲間に対する気配りも出来ている。同じ時期に入社した社員も何人かいたが、ほとんど途中で退社していった。「美容師になりたい」とか、「競輪の選手になりたい」とか、いろいろな理由を言いながら、辞めていった。辛抱も必要だが、おそらく途中で「技術者のやりがい」を見出すことが出来なかった。

結婚した社員は節目の間隔がいいローテーションとなつて現場を経験することが出来、成長した。3年目で2級土木施工管理技士の資格も取れたし、その後は独り立ちをしながら大規模な工事にチャレンジすることが出来たことも「技術者のやりがい」精神を培うのに大いに役立った。09年の暮れには1級土木施工管理技士の資格も取ることが出来た。資格と現場の組み合わせが順調な技術者、中堅技術者として新たなステージを踏み出す春の結婚式だった。

新年度、業界に対しては前向きな風が吹き出している。「事業量の確保」と年度末に引き上げられた「労務単価」、それに加えて「技術者のやりがい」を培う資格制度、この3本の矢が確実に回りだせば疲弊した業界もじわじわと立ち直りそつだ。とりあえずは「資格取得期間の短縮」あたりから、もう一度、声を上げてみようか。